

---

# しがない殺し屋。

Sagittar

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

しがない殺し屋。

### 【Nコード】

N1123E

### 【作者名】

Sagittar

### 【あらすじ】

殺し屋に両親を殺された少年。殺した奴に復讐するため、もう自分のような者を生まないようにするため彼が就いた職業は「殺し屋」。

## プロローグ

人は死ぬ、こんなにも簡単に。

父さんと母さんを殺したのは、たった5センチほどの鉄の塊だった。いや、それを撃った人間か？ 殺される理由なんてなかった。殺されていいわけなかった。

だけどそんな父さんと母さんを“奴”は殺した。

許せない、許してはいけない。

だけど、どうしたら“奴”に復讐できる？

「警察官になれ」

俺の親戚はそんなことを言った。

警察に入って“奴”に復讐できるわけがない。

“奴”は殺し屋だ。

自分が「殺した」なんて証拠は残すはずがない。だったらどうすればいい？

そう、俺も「殺し屋」になればいい。

「武田さん、何か言い残すことはないですか？」

俺はそう言い銃を向ける。

「やめろ！俺はまだ死にたくない！」

もう慣れたことだが、いちいち説明するのはめんどくさい。

「待ってください、俺はあなたを《この世から消す》が《殺し》はしません。」

想像どうり相手は訳がわからない、といったような顔をする。

「あなたを《殺した》ことにして、仕事を終えるんです。あなたはこの世からいなくなつたことになり静かに生きていかなければならなくなりますが、少なくとも生きていられる。1週間ほどしてから海外にでも逃げればいい」

「お前は殺し屋じゃないのか？」

「ああ、しがない殺し屋さ・・・」

## プロローグ（後書き）

この小説はハードボイルドな殺し屋ストーリーではありません。少年が復讐、そして本来殺される人物を助ける物語です。

## 第1話：殺さない殺し屋

「仕事、終わりましたよ」

俺は依頼主にそう言った。

「そうか・・・で、奴をどうした？」

そう聞かれたので俺は

「海に沈めておきましたよ。これで奴は《死んだ》のではなく《行方不明》として扱われますよ」

と、言っておいた。

「くくつ・・・これで私は奴の会社の社長になれる・・・」

まったく・・・本当に死んだほうがいいのはこういう奴らじゃないか。

「金は指定の口座に振り込んでください」

「ああ、わかつている。2000万だったか？この程度 of 金で人を殺すとはな・・・」

《この程度 of 金》で殺すよう言ったのは誰だ？

「仕事ですからね」

そう言い俺は電話を切った。

「なんでこんな危険なことをしているんだ？私が死んでいないとばれたら君はおそらく殺される」

さっきまで銃を向けられて怯えていた武田さんが話しかけてきた。

「俺が《殺さない殺し屋》をしている訳は言えませんが、でも俺にはやらなければならないことがある。たとえどんな困難が待ち受けていようと」

そう、俺がこの仕事をしている理由は復讐のためだ、俺のようなものを生むためではない。この仕事は時にチームで殺しをおこなうことがある。この仕事をやっている者は少ないので、いずれ《奴》と同じチームを組むときが来るだろう。そのときが来るまで俺は《殺さない殺し屋》を続けなければならない。

「そうか・・・でもありがとう。君みたいな人がいたおかげで私は死なずに済んだ」

そう笑顔で言われると、やりきれなくなった。たしかに死なずに済むかもしれない。だが、これからの人生はむちゃくちゃになるはずだ。いままで築いてきた人間関係がすべて壊れ、孤独に生きていかなければならない。俺は死者は作らなかったが、《生ける屍》とでも言うべき者をつくってしまった・・・

「あなたにはこの《殺し》の報酬金をお渡しします。これで少しは楽になるでしょう」

「そんな金、もらってもいいのかい？」

「もちろんですよ」

「何から何まで本当にありがとう。君の名前だけでも教えてくれな  
いか？」

「神城……かみしろけんじ神城賢二」



## 第1話：殺さない殺し屋（後書き）

今回は、殺さないことの問題点に触れてみました。

死んでるように生きていくのか、いつそのこと死んでしまうのか。

いったいどっちの方がその人にとって《正しい》選択なのでしょう  
か？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1123e/>

---

しがない殺し屋。

2011年1月13日08時27分発行